

論文の内容の要旨

芸術家アルフォンス・ルグロの静かな闘い — 19世紀英仏芸術運動における「リアリズム」の行方

氏名 安藤智子

本論では、19世紀フランスに生まれイギリスで活動した芸術家、アルフォンス・ルグロ(1837-1911)について言及する。ルグロは英仏の芸術運動のなかで新しい絵画を探求し、イギリスにおいて近代フランス芸術の普及に努めたその革新性を考察することを本論の目的とする。

ルグロは、エドゥアール・マネやジェイムズ・アボット・マックニール・ホイッスラー、アンリ・ファンタン＝ラトゥールらとともに、ギュスターヴ・クールベのリアリズムの洗礼を受けた若きリアリストとして、1860年頃からパリの画壇で活躍している。1863年にはホイッスラーの勧めでイギリスへと渡り、ロンドンのスレイド・スクールで教授を務め生涯をイギリスで送る。

ルグロの絵画は、主に地方の民衆が祈る姿や、教会で修道士が聖務を行う場面が描かれ、丹念で精緻な描写、そして浅い絵画空間と暗い画面が特徴的で、過去の巨匠たちの絵画からの影響を思わせる。先行研究でルグロは、過去の造形様式に倣った「折衷的」な画家であり、早い時期にパリの前衛的な芸術から離れてしまった画家として位置づけられてきた。このような過去のルグロ像に対し、筆者は二つの観点から画家の再評価を行った。

第一点はリアリズムの系譜にある宗教風俗画を描く画家としてのルグロである。

1861年のパリのサロンでは、森の片隅で粗末な磔刑図に跪き祈りを捧げる田舎の女性たちを描いた《エクス・ヴォト（奉納画）》を発表し、この作品は生涯において最も議論を呼んだ。本論ではこの絵画にはルグロの「リアリズム」の諸問題が先駆的に表れている作例として重点的に扱う。

この作品では、綿密な写実性のもとに人物の顔や手が描写される一方で、人物のフォルムは簡略化され、女性たちは奥行きを浅い絵画空間に配置されている。このような画面は同時代の人たちによると、反アカデミックな絵画様式によって「素朴さ」を意図的に創出し、さらに「現代生活の感覚」をも表象していると看取されていた。

これらルグロの造形言語は、物質性や再現性を重視した写実性を人物の表情や手といった限定的な描写に残しながら、人物の造形性と性格とが一致して一つの印象を作り出す象徴主義的な傾向を兼ね備え、また反アカデミックな様式の着想源となるプリミティヴな絵画の志向も表している。これらの徴候は19世紀後半の近代絵画の傾向を早くも提示している。とくにルネサンス以降の幾何学的な遠近法に依拠しない絵画空間の構成については、先述の若きリアリストたちの共通の課題であり、彼らも現代的な主題と反アカデミックな造形様式の融合を作品で試みている。

さらに《海の祝別式》においては、英仏海峡沿岸のフランス北部の漁村に住む人々が葬礼に参列している様子が描かれている。ここではより複雑な画面構成を用いて、地方の宗教行事という現代性のある主題が描写されている。当時においても、画面に描かれた母子像が目を引き、ルグロの愛国心を表した絵画であると受け取られていた。画中の母子像の寓意性と特異な画面設定によって、さらにルグロの政治思想と1870年代前半のフランスの国情を勘案し、この作品は共和派によるフランス共和国への支持の表明であるという解釈を筆者が提示した。よって《海の祝別式》は、地方の宗教行事という主題を見ると「地方主義（リージョナリズム）」に通じる、ナチュラリズムへの移行期の作品として捉えられる。しかし人物の象徴性と画面全体のプログラムに及ぶ観念的な構成によって物語を創出するという点では、象徴主義の要素を内包し、人工的な画面構成はナチュラリズムの傾向とは相容れない絵画である。

中心モチーフの人物が典型化され、画面の描写や構成において写実性と象徴性が混在し、特異な絵画構造が平面性を志向するという点が、ルグロの絵画の特徴となっている。このように、既存の美術史の範疇に属することなく位置付けが困難なところにルグロの絵画の本質が存している。これらの造形要素にみる革新性は改めて評価されるべきである。

また第二の方向性は、ルグロを当時の芸術動向や芸術運動と関連付け、芸術家のグループの一員として考察することにある。

芸術家のグループのなかでの活動は、先述した若きレアリストたちとそろって1863年の落選者のサロンに作品を展示したことに端を発している。ルグロも《マネの肖像》を発表することで、マネとの芸術上の共感を表明した。

ルグロは1863年に渡英してからは、ラファエロ前派の画家たちとくにダンテ・ゲイブリエル・ロセッティやフレデリック・ワッツ、そしてフレデリック・レイトンといったイギリスの前衛的な画家たちと親交があった。ルグロはパリの画壇の動向にも目を配り、マネやクールベの影響が考えられる裸婦像をイギリスで女性ヌードの絵画が流行した時期に発表している。

しかし渡英後のルグロにとって重要であったのは、パリ時代に通ったオラス・ルコック・ド・ボワボードランのアトリエの旧友たちである。ルグロは1870年初頭に普仏戦争とパリ・コミューンを逃れてロンドンに亡命してきたルコックのアトリエの仲間たち、ジュール・ダルーやギョーム・レガメー、レオン・レルミットを迎え、自分の支援者へ紹介し、彼らの作品の売却の手助けをする。同時期に、共和主義への共鳴やフランスの国情を示す絵画を公の展覧会に発表し、その代表例が《海の祝別式》であった。

絵画作品にも表明されている共和主義への共感が、1870年代以降にルグロが属していた芸術家のグループとその支援者たちのサークルの根底にあった。ルグロとルコックのアトリエの仲間との連帯感は、一つの芸術家グループを形成し、彼らはフランス共和主義に賛同するイギリスのコレクターや美術批評家たちの支援を得た。ルグロが当時の有力な国会議員で、フランスの共和主義を信奉していたチャールズ・ディルクの注文を受け制作をした《レオン・ガンベッタの肖像》が示す通り、ルグロという芸術家とフランス共和主義の領袖であるガンベッタが大変近い関係にあり、芸術と政治の重なり場に作品制作があったことは特筆すべきことである。そしてルグロと仲間の芸術家たちが農民や漁民の家族、労働に携わる人たちを形象したことも、彼らが共有した政治思想と呼応している。

さらにそのルグロの支援者であるイギリス在住のギリシア人コレクター、コンスタンティン・アイオニディスに対し、ルグロが作品購入をアイオニディスに勧めることにより、フランス近代美術を中心としたコレクションの形成に大きく関与したことに着目した。ジャン＝フランソワ・ミレーなどのバルビゾン派の絵画やドガの作品に加え、当時は無名であったルグロをはじめダルー、ロダン、レガメー、レルミットといったルグロの友人たち

の作品がコレクションの中核をなしている。そのなかでも同じくルコックのアトリエと一緒に学んだ友人であるロダンを支援し、その作品をルグロが仲介役となってイギリスで普及した活動はその顕著な例である。ルグロの働きにより、同時代のフランス美術がイギリスにおいて公的に展示され活字で宣伝されたことは、ロイヤル・アカデミーへの異議申し立てという意味でも、さらに社会一般への教育という点からも重要である。

芸術の一般への教育という観点は共和主義的な思想にも適い、スレイド・スクールでの美術教育を含め、ルグロは英仏の美術交流において大きな役割を果たしている。

つまりルグロは作品上の主題においても、実際の芸術活動においても、同時代の社会状況に密接に繋がり、芸術と政治との接点にルグロの活動があったことは、改めて認識されるべき事実である。

1860年初頭を起点とする新しい絵画を探求する運動としての「レアリスム」は、前衛的な造形性を提示し、共和主義思想で結びついた芸術家グループの一員としての活動であったと結論付けられる。

ルグロの絵画が既存の美術史の範疇には分類できず、ルコックのアトリエの画家たちを中心とした芸術家グループによる芸術活動が名付けられることもなく、ルグロの特異な芸術及び芸術活動は美術史研究では看過されてきた。しかし本論で歴史的な文脈においてルグロを再検討することによって、ルグロの芸術の造形上の先駆性と社会と関連したその革新性を新たに提示した。